

（２）額安寺宝篋印塔について

額安寺現境内の東方に「明星池」と呼ばれる池があるが、この中島に１基の宝篋印塔が立っている（図14-1）。以前は池の北堤付近に倒壊していたようであるが、1974年に清水俊明によって発見された（清水1974）。基礎は２区に分ち格狭間を大きく描き、基礎上と笠下部分の段は各３段になる。塔身には月輪内に金剛界四仏の種子を薬研彫し、二重の輪郭を有する。隅飾は１弧で古相を呈する。笠上の段は６段で、露盤も基礎と同様、２区に分ち格狭間を刻んでいる。総高284cm、花崗岩製である。

本塔が注目される点は、現東面の基礎格狭間内に「文応元年 十月十五日 願主 永弘」「大工大蔵 安清」の銘を有していることである。大蔵安清は鎌倉後期を代表する工匠集団、大蔵派の一人であり、文応元年（1259）銘を有する額安寺塔は数ある「大蔵派宝篋印塔」中でも最古の遺品である。また大和においては正元元年（1260）銘の興山往生院塔に次いで古い宝篋印塔でもある。

大和には、奈良市菩提山町正暦寺にも大蔵派の手によると考えられる遺品がある（図14-2）。この塔は額安寺塔と同様、基礎や露盤に格狭間を刻み、塔身には二重の輪郭を有し、基礎上の段数が３段になるなど、関西における他の宝篋印塔には見られない特徴を有しているが、隅飾が２弧で、複弁反花座を有する点などに額安寺塔よりも新しい要素が認められる（紀年銘はない）。大蔵派のこの後の遺品は、神奈川県足柄下郡箱根町元箱根にある（図14-4）。精進池のほとりにある高さ265cmの宝篋印塔には「永仁四年（1296）」「大工大和国所生左衛門大夫 大蔵安氏」の銘がある。この塔は正安２年（1300）に追刻がなされており、この時に「供養導師良観上人」「心阿」の名が刻まれる。良観上人と言うまでもなく額安寺中興をなした良観房忍性のことであり、ここに布教・勧進活動を行う忍性に伴って関東へと移動する大蔵派という構図が見出せるのである。

大蔵派はこの後、神奈川県足柄上郡大井町上大井（嘉元２年〔1304〕銘、通称「余見塔」、図14-3）や、同厚木市愛甲の円光寺（「大蔵」銘はなし）にも大蔵派宝篋印塔を造立し、元箱根塔に名を残す「心阿」もまた大蔵派と同様式の宝篋印塔を鎌倉市安養院（図14-5）などに造立している。さらに「心阿」の子の「光弘」も鎌倉市覚園寺に、２基の大蔵派宝篋印塔を造立している。これら大蔵派がもたらした様式は、やがて「関東形式」宝篋印塔（川勝1936・1960・1974）の原形となっていく（岡本2003）。

大和における額安寺塔は、大蔵派が大和において実際に活動していた石工であることを実証する唯一の貴重な遺品である。また、額安寺には忍性の舍利容器が納入されていた石造五輪塔も存在しており、これらの遺品は忍性と石工との関係を探る上でも重要である。

【参考文献】

岡本智子 2003「大蔵派宝篋印塔の研究」『戒律文化』 2

川勝政太郎 1936「宝篋印塔に於ける関西形式と関東形式」『考古学雑誌』 26- 5

1960「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』 4

1974「大蔵派宝篋印塔と関係遺品」『史迹と美術』 449

清水俊明 1974「大和額安寺の宝篋印塔」『史迹と美術』 446

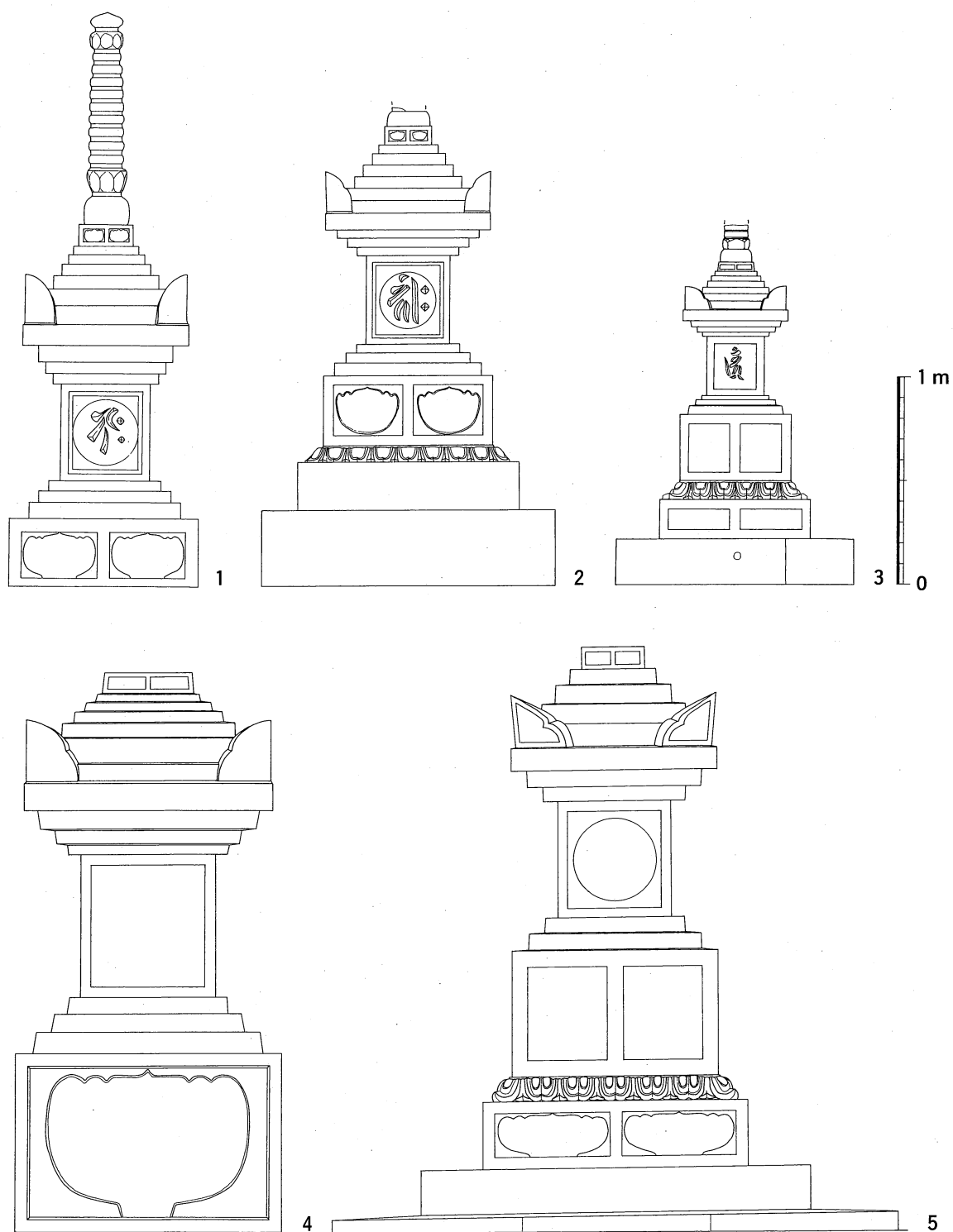


図14 大蔵派宝篋印塔実測図 (S : 1/30)

- 1 : 額安寺宝篋印塔 2 : 正暦寺宝篋印塔 3 : 余見宝篋印塔 4 : 元箱根宝篋印塔
 5 : 安養院宝篋印塔 (財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書』安養院、1980より再トレース)